

維持透析中止後の生存日数に関連する因子の検討

医療法人衆和会 長崎腎病院 長崎大学病院 腎臓内科

○山口貢正 北村峰昭 船越 哲 西野友哉

【背景】

終末期のケアを検討する上で透析中止から死亡までの期間の予測は不可欠であるが、実際の生存日数は患者毎に幅があり関連する因子の報告は少ない。

【方法】

長崎腎病院において 2011 年から 2021 年までに透析中止後死亡した血液透析患者 174 例について最終透析時の患者の状態や検査値と生存日数の関連を検討した。

【結果】

患者の年齢は 80.2 ± 10.7 歳、女性が 47.0%、透析歴の中央値は 3 年であった。年齢、性別、透析歴、K 値、CRP 値、Hb 値などで補正した COX の比例ハザード解析では低酸素血症 (ハザード比: 2.32、95%信頼区間: 1.55-3.47、 $P < 0.01$) や人工呼吸器の装着 (ハザード比: 0.26、95%信頼区間: 0.11-0.58、 $P < 0.01$) が独立した予測因子であった。透析中止の判断前に全例人工呼吸器は装着されていなかった。抗生剤の投与、昇圧剤の投与は生存日数と関連しなかった。

【結語】

透析中止後は低酸素血症や人工呼吸器装着の有無が生存日数の予測に役立ち、患者や家族の精神的な受け入れや希望するケアプラン実行の助けとなる可能性がある。